

# 通夜・葬儀

釈尊（お釈迦様）は、今を去る約二千五百年前、インド北部のクシナガラで八十歳のご生涯を閉じ、永遠の安らぎに入られました。

この時、すでに体調を崩させていた釈尊の周りには、その身を案じ、大勢のお弟子が集まつておりました。釈尊は弟子たちに遺言となる教えを説かれその結びに

「友よ、私は永遠の安らぎに入るときが来た。友よ、我が最期を黙して見守り、無常を観ぜよ。」

このように言われると、静かに最期の時に向かわれたのです。この夜、弟子たちは、夜通し釈尊を見守りました。釈尊最期の教えは、自らの死によつて

無常を示された無言の説法だつたのです。

この故事にならい、私たちはお通夜を営みます。お通夜に臨んで、私はちは故人の無言の説法を共に受けとめたいものです。

今、私たちに無常の説法を説かれている故人は、すでに一切のこだわりを離れた方です。私たちも、こだわりを捨てなければなりません。故人が如何に親しい方であつても、何も諂いがなかつたとは言えないのではないでしょうか。懺悔文をお唱えすることで、故人と共に許し合うことが出来るのです。

お葬式は、故人に仏としての仏戒（帰依仏法僧、三聚淨戒、十重禁戒）を授ける式であります。仏教徒である私たちは、仏戒を受け戒名を授かつた故人を仏様として敬い、人生の導き手とするのです。

# お葬式に際して うなぜ御供養なのかく

お葬式とは故人と縁ある人達が集い、亡き人を語り、偲びながら過ごすものです。

今、この時なぜ御供養なのかを考えてみれば大きく二つになります。

まず最初は、人が今まさに亡くなると言う時は家族の者といえども何もしてあげられないと言ふ事です。悲しいことではありますがそれが本当の姿なのです。

しかし亡くなられた方に対して出来る事がありますし、せねばならぬことがございます。それが唯一御供養です。生きている者が亡き人に出来る事は、どんなに探しても御供養しかありませんし、今はその唯一出来る御供養を、心を込めて勤めるより外はないのです。亡き人を思う心が如何に尊くとも、その心は色も形も香りもありません。その形のない心を儀式と言う形有るものに託し表して行うのが、お通夜であり、お葬式なのです。香を焚き、水を供え、灯をともし、花で飾り、生前お好きであった美味しい品を揃え、読経の功德を廻らすのです。ここに儀式の尊いところがあります。

二つ目は、亡き人を縁として故人の死が自分にとつてどの様な意味を持つものであるかを、心静かに自らに問い、更には故人の死を自分の人生の上にどの様に活かして生きていくか、と言いう事です。

人が亡くなる時に周りの人は何もすることが出来ないと言う事は、逆に自分の時には何もしてもらえない、と言う事です。しかも無常の風はいつ私達の足許をすくうかわかりません。だからこそ、

お釈迦様は

「己こそ己の依るべ、己をおきて誰に依るべぞ、よく調べし己にこそ、まこと得がたき依るべをぞ得ん。」

と示されたのです。確かに自分が本当の依り所なのです。

そして最後の依り所なのですが、その自分が本当に依り所となつてゐるのかと自らに問えば、真にあてにならぬ私達なのです。だからこそ亡き人を縁として眞実に目覚めなければならぬと思うのです。亡き人を自分の人生の上に載せて生きることは、その生き方そのものが故人への行いの供養となります。

